
管理者物語

ダイソン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

管理者物語

【Nコード】

N4662J

【作者名】

ダイソン

【あらすじ】

あらゆる多重次元世界を管理する管理者。名前だけ聞けばカッコイイかもしれないがそんないもんでもない。これはある管理者の物語である。どうも初めまして、作者のダイソンです。この小説は多重クロス。また、オリジナル主人公があります。処女作なので文章とか長かったり短かったりとぐちゃぐちゃで。内容もぐちゃぐちゃしています。それでOKな方は見てやってください。

プロローグ（前書き）

始まってしまいました。初っ端からあるアニメキャラが出て来てます。出した理由は、作者が好きだから！ 後、主人公の名前は作者の友人から許可を貰って友人二人の名前を合わせただけです。

プロローグ

パラパラと手に持った書類を捲っていく。一枚一枚にギッシリと書かれている文章を見て嫌になってくる。

この書類を見始めてから大体1時間経っただろうか？ 残り10数枚程度になった書類に目を通してながらそんな事を考えてみる。チラッと時計に目を向ければ、予想通り1時間と少し経っていた。

「――ふうっ」

ドサツと読み終えた書類を机の上に放り投げ椅子に深く腰掛ける。首をコキコキと鳴らしもう一度溜め息。

普通ならば高校に通っているはずの俺が何でこんな事をせねばならんのか、真っ白な部屋を見渡しながら考えてみる。

2年前。そう、始まりは2年前のあの日からだ。あの忌ま忌ましい自称神様の腹黒鬼畜野郎が俺を此処に連れ――いや、拉致って来たせいだ。それからと言うものの、人間の方が都合がいい、なんて理由で勝手に世界の管理者なんてモノにされるし。しかも俺に決めた理由がコンピューター使ったランダム抽選とか言っていた。

「――ああ、思い出したら腹が立ってきた」

前の俺は温厚だったはずなんだが、これもあの自称神様のせいだ。

このイライラをどう静めようか考えていると、視界の端から腕が伸びてきて、書類で埋め尽くされた机の僅かなスペースにコトツとジュースを置いた。

特に驚きもせず椅子を横に回し腕の主に目を向ける。そこにはやはり見慣れた姿があった。ミニスカのメイド服、赤い髪を左右で結んだポニーテール。俺のパートナー兼メイドのアイリがそこにいた。

「なあ、気配を消して近づいて来るのやめないか？」

「あら、私はちゃんとノックしましたわ。御主人様がブツブツと独り言を言っていて気づかなかったただけですわ」

「……お前って最近アイツに似てきたな」

「――心外ですわ」

即答かよ。まあ、元死霊だけあって神様は好かんのか。

『おやおや、中が宜しいようで、私も安心です』

――突然の第三者の声。

俺はいきなり会話に割り込んできた不屈き者に目を向ける。

「なんの用だこの野郎」

『おやおや、これはまた随分とイライラしていますね。カルシウムを取った方がよろしいのでは?』

「……お前がいなくなればこのイライラも解消されるさ」

『それは無理な相談ですね』

くっ！ 無償に画面の向こうにいるコイツを殴りたい！

『それはそうと——任務です』

画面に映る青年の顔が真剣なモノに変わる。

任務。その言葉を聞いて俺とアイリの表情も真剣なモノになる。

『今回の任務は多重次元世界第32番“地球”で行います。情報によると、どうやら昨日の午後11時頃。微弱ですが地球——いえ、日本のある一部の地域で“アビス”の反応が観測されました』

「ちょっと待て、地球だと?」

しかも日本?

『ええ、とは言ってもアナタの住んでいた地球とはまた別の地球ですがね』

その言葉を聞いて俺はホッと息を付く。が、直ぐに表情を戻し話に集中する。

『では、話を続けます。実はこの世界ですが、少し特殊でして。他の世界とも繋がってるんですよ』

「繋がってる？」

『ええ、人の住む人界。神族と呼ばれる者の住む神界。魔族と呼ばれる者の住む魔界。この3つの世界が繋がっています』

「神界とか魔族とか、まるでファンタジーだな」

『そうですね。どうやら魔法という概念が存在する様ですし』

魔法とか、ますますファンタジーだな。

「文明レベルはどの程度まで発展しているんですの？」

『文明レベルは恭介くんの住んでいた世界と差ほど変わりありません。まあ、後の事は資料を送りますのでそちらで確認してください』

「りょーかい」

「わかりましたわ」

『それでは恭介くん、アイリさん。ああ、それと恭介くん。ちゃんとカルシウム取ってくださいね？』

「テメエはいつもいつも一言多いんだよ！」

余計な一言を残して笑いながら自称神様は画面から消えた。

「ったく。アイツと通信してる度に叫んでる気がするの俺の気のせいかな？」

「気のせい……では、ないですわね」

はあっ、と2人揃って溜め息を付いた。

プロローグ（後書き）

キャラ設定って書いた方がいいのかな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4662j/>

管理者物語

2010年11月8日19時54分発行